

# 中学校における通級による指導の在り方に関する研究

—担当者へのアンケート結果から見た現状と課題—

○笹森洋樹 若林上総

(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所)

KEY WORDS: 中学校 通級による指導 現状と課題

## I. 目的

インクルーシブ教育システムにおいて通級による指導は連続性のある多様な学びの場の一つとしてさらなる充実が求められる。平成 28 年 12 月に学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の公布（施行は平成 30 年 4 月 1 日）がされ、平成 30 年度からは、高等学校においても通級による指導の制度運用が開始される。発達障害等のある生徒が高等学校進学後も通級による指導を継続し、合理的配慮や将来の社会的自立について自己の理解を深めるためには、その前段階となる中学校期において、思春期の様々な課題についての支援の在り方を考えておくことが重要と思われる。

しかし、小学校に比べ中学校の通級指導教室の設置は極端に少なく、また利用している児童生徒数も、平成 28 年度の文部科学省調査によれば、小学校 87,928 名、中学校 10,383 名となっている。本研究は、なぜ中学校では通級による指導が広がらないのか、その現状と課題を整理するとともに、今後のインクルーシブ教育システムにおいて望まれる中学校における通級による指導の在り方について検討することを目的としている。今回は、全国の中学校通級指導教室設置校へのアンケート調査から見える現状と課題について報告する。

## II. 方法

全国の中学校通級指導教室設置校を対象に現状と課題に関するアンケート調査を実施した。

### (1) 対象

国立特別支援教育総合研究所の全国特別支援学級・通級指導教室設置校一覧を参考に、平成 28 年度に通級指導教室を設置していることが確認できた全国の中学校通級指導教室設置校（特別支援学校の設置校は除く）

### (2) 手続き

都道府県教育委員会及び市区町村教育委員会に了解のもと通級指導教室設置校宛に質問紙を郵送し、担当者へ回答を求めた。設問は教室用と担当者用があり、担当者が複数の場合は、担当者すべてに回答を求めた。

### (3) 調査内容

- ・担当者について、担当者の業務、
- ・通級生徒の概要
- ・通級生徒に関する課題（在籍校と通級の違い）
- ・通級による指導の課題（専門性、運営、連携等）
- ・中学校通級の設置が少ない理由

## III. 結果

426 校から回答があり回収率は 62.2%であった。

（分析対象の担当者数 604 名、生徒数 6145 名）

### 【担当者について】

教職経験平均 22 年、通級経験年数 3.7 年、有効回答者のうち特別支援学校教諭免許保有者の割合は 55.7%であった。

### 【通級生徒の概要】 6145 名

学年にばらつきはなく男女比は 3 : 1。通級形態は、自校通級 53.4%、他校 37.7%、巡回 8.5%、指導時間帯については、授業時間内 77.3%、授業時間外 19.6%、不定期 4.6%であった。小学校からの継続通級は 39.5%であった。

### 【在籍校と通級での生徒の課題の違い】

在籍校が通級の必要性の判断としているのは、「学業に関する課題」が最も多く、以下「自己表現やコミュニケーションに関する課題」「友人関係等に関する課題」「進路に関する課題」の順であった。通級担当者による通級生徒の課題は、「自己表現やコミュニケーションに関する課題」「友人関係等に関する課題」「学業に関する課題」「進路に関する課題」との順で優先順位が少し違っていた。その他に「障害受容や自己理解に関する課題」について通級担当者は重視しているが、在籍校の課題意識は低かった。

る課題」が最も多く、以下「自己表現やコミュニケーションに関する課題」「友人関係等に関する課題」「進路に関する課題」の順であった。通級担当者による通級生徒の課題は、「自己表現やコミュニケーションに関する課題」「友人関係等に関する課題」「学業に関する課題」「進路に関する課題」との順で優先順位が少し違っていた。その他に「障害受容や自己理解に関する課題」について通級担当者は重視しているが、在籍校の課題意識は低かった。

### 【通級による指導の課題】

- ・生徒の指導に関する課題としては、「授業を抜けることへの抵抗感がある」、「生徒の実態の多様化への対応が難しい」、「特性に応じた教材等の準備ができない」、「指導の客観的評価ができない」等。
- ・担当者の専門性の課題では、「公的な研修の機会が少ない」、「育成のシステムがない」、「校内人事等で担当者が決まる」、「自立活動や SST、LD の指導が難しい」、「発達検査に関する知識がない」、「免許のない教科の専門性がない」等。
- ・教室運営に関する課題では、「生徒数の増加に伴う教員の配置ができていない」、「放課後に通級する生徒も多く業務量の負担が大きい」、「専用の教室がないなど教室配置や教材、備品等が十分でない」、「予算が確保されていない」等。
- ・在籍校との連携に関する課題では、「通級に関する理解が不足している」、「連携のための時間設定が難しい」、「生徒の課題について共通理解が難しい」、「学校間、教員間により意識の差が大きい」等。
- ・保護者との協働に関する課題では、「学習の補充の要望が強い」、「特性についての理解が不十分である」、「連絡が取れない」、「担任等との意識のズレがある」等。

## IV. 考察

担当者のアンケート結果から中学校の通級の現状と課題は、以下のようにまとめられる。

一つ目は、対象となる生徒のニーズ把握の難しさである。周囲の目を気にする時期でもあり、自分だけ授業を抜けることへの抵抗感、表面上は困難さを見せず、教師や保護者が必要性を感じないことが挙げられる。放課後の通級が多くなることも関連している。

二つ目は、教師の気づきのシステムの問題である。教科担任制は担当教科の授業場面での行動観察が中心となる。目立った行動面での課題は生徒指導上の課題として挙がりやすく、二次的な問題としての視点で捉えにくい。

三つ目は、自立活動の指導内容の理解の問題である。行動面の対応は生徒指導が中心となり、心理面には教育相談対応がある。通級には学習面の補充を求められる場合が多くなる。通級は自立活動の指導が主であり、教科学習の補充は本来の目的とは異なる。

最後に、これらの課題の全体に関係するが、通級による指導の役割、期待されることの理解と周知の不足である。専門性のある教員の配置、教室環境の整備、教材等を購入するための予算面の確保など教育行政によるところが大きい。生徒、保護者、学校関係者だけでなく、地域における理解啓発を進めることは急務である。

( SASAMORI Hiroki, WAKABAYASHI Kazusa )